
マッスルファンタジー

三六九

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マッスルファンタジー

【Nコード】

N7776M

【作者名】

三六九

【あらすじ】

神様の手違いで異世界へ飛ばされた主人公。

元に戻る事は叶わず、飛ばされた地で生きる事を決意する。

剣と魔法が交差する中、己の筋肉一つで活路を切り開く異世界筋肉ファンタジー。

事の始まり

その日は普段と異なっていた。

時間通りに起きる事が出来なかった。

お陰で十分な朝食もとれず、腹二分目の状態で登校するはめになった。

「まずいな……急がないと完全遅刻だ」

季節は夏、既に高く昇った太陽の光を浴びて、本能の赴くまま鳴く蝉の声を背に、一人の男 田中誠一郎 が自転車を走らせていた。

胸元を横切る様に一筋の黒いラインが引かれた白のTシャツ、ベージュのハーフズボンそして紺の野球帽を被り、軽快車ママチャリを走らせる。

その姿は何処にでも居る一般大学生だった。見事に鍛え上げられた肉体を除いて。

「よし……！この坂を下ればもう直ぐ駅前だ！」

前傾姿勢を取り、ブレーキレバーに指をそえ、ペダルに力を込める。

傾斜はさほど無いものの、長々と続く下り坂を一気に駆け下りる。意識が前方に集中し周りの風景が後ろに流れていく。

「うつ……汗が……！」

左目の痛みに意識が前方から逸れ、左手をハンドル離れた瞬間ガ

クンと前輪が沈み、

誠一郎は空へと投げ出された。

「ちょ……なんで段差が……！？」

何者かに背負い投げをされた格好で宙を飛ぶ。

ゆっくりと周りの景色が回転するのが見えた。

（これが走馬灯ってやつ……？）

周りの景色の速度が加速し、黒々としたアスファルトへ吸い込まれていく。

後頭部から首へ、そして背中を經由して腰、踵が次に最後に膝。

誠一郎はアスファルトに飲み込まれるようにその姿を消した。

「……………？」

誠一郎は待てどもやってこない体への衝撃に、恐る恐る右目を開けた。

右目に映るのはアスファルトに無残に転がる自分の姿 ではなく、

青い海と白い砂浜。

続いて左目も開く。

やはり目の前には青い海と白い砂浜が広がっていた。

「……どう、なつてんだ？」

帽子を脱ぎ、短く刈上げた坊主頭を撫でながら、誠一郎はゆっくりと腰を起こす。

「怪我は……無いみたいだな」

軽く二、三度スクワットし、自分の体を確認める。

「打撲や捻った感じも無しと……」

軽く自分の頬を叩き、両目を瞬かせる。

「痛みは感じるし、何度瞬きしても目の前の海はアスファルトに変わらないと」

両手を頭の上で組み、背伸びをする。

「ふつ……知っているぞ。これはあれだ、異世界なんちゃらだな」
『慌てふためかないのはありがたいが、冷静すぎるってのも寂しいもんだな』

「なん……！？」

不意に頭に響く声に誠一郎は思わずファイティングポーズを取った。前方には青々とした海、視線だけで左右を確認する。

（誰も居ない……か）

白い砂浜に前転し、即座に後方を低い体勢で確認する。

（後ろも無しと……）

誠一郎はすつと立ち上がり、姿の無い声の主に警戒体勢を取る。

「お前は……誰だ？」

『私の名はフォン。神だ』

「低めの声からして男か……チェンジだ！」

『何を言っているのか分からないが諦めろ。というか、驚かないのだな』

「そうでもないさ。心の臓はドキドキ言ってるし、初めての事だからだしな。だけど、喚いたって何も変わらない事だけは分かる」

神、それも姿の見えない相手では分が悪い。

そう感じた誠一郎は警戒を解き、砂浜に胡坐を組んで座る。

「それで、神様が俺に何の用なんだ？まさかうつかり俺のこの世界に放り込んでごめんね、とかいうお約束じゃないかな？」

誠一郎の問いに、フォンと名のつた神からの返答は無かった。

「……図星かよ……」

『済まない』

短く切りそろえられた坊主頭を掻きながら、誠一郎は考える。

異世界に飛ばされた。それも神の手違いで。

なんというかお約束過ぎてぐうの音も出ない。朝食がおざなりだったので腹の音が代わりに出そうだ。

「元の世界には帰れるのか？」

『それは私の提案に対する君の返答次第だ』

「俺の返答次第？ どういうことなんだ？」

フォンは咳払いを一つし、二つの提案を示した。

一つはこの世界で生きていく事。その場合、異世界へ飛ばしてしまつた謝罪としてこの世界で有効な願いを一つだけ叶えてくれる。

ただし、元の世界には何があつても戻る事は出来ない。

次に元の世界へ戻る事。この場合、俺はアスファルトに直撃する直前から始まるらしい。

運が悪ければそのまま昇天する可能性がある。

「なんだよ……一つしか道がねーじゃんかよ」

元の世界には戻りたい。しかし、戻つて死んでしまえば意味が無い。

『私の不手際とはいえ、本当に申し訳ない』

「いや……まあ、その……なあ？」

相手が不遜な、もしくは高圧な態度を取ってくれば、誠一郎も反発する形で憤慨する事も出来ただろう。

しかし、こうも下手に出られてしまうと、理不尽に対する怒りの矛先が路頭に迷つてしまう。

「はあ……いいよ、この世界で生きてみるよ」

『そうか、では一つだけ願いを叶えて進ぜよう。何なりと言つてくれ』

「それじゃあ、何者にも屈しない強靱な肉体筋肉を」

『今でも十分素晴らしい体躯だと思ふのだが……』

「元居た世界ならな。この世界では通用するか分からないだろ？」

『なるほど、承知した』

少し目を閉じているとフォンの声に従い、誠一郎は静かに両目を閉じる。

暫くすると体の芯から温まる　まるで温泉に入った様な　それは徐々に体中に広がり、
やがてゆつくりと消えていった。

『願いは無事叶えられた。後、この世界で意思疎通ができるよう言語能力も強化しておいた』

「良いのか？叶えてくれる願いは一つだけなんだろう？」

『私なりの謝罪の気持ちだ。受け取ってくれ』

「そっか、あんたが良い神様で良かったよ」

『そう言ってもらえると助かる』

ゆつくりと腰を起こし、腕を回す。

心なしか体が軽く感じ、気を良くした誠一郎は垂直に飛び上がる。
その跳躍は優に二メートルを超え、誠一郎は目を白黒させた。

「その…なんだ、行き過ぎな気がしなくも無いな！」

『じきに慣れる』

そうだと良いな。と誠一郎は砂浜に落ちた野球帽を被りなおす。

『そろそろ私は行かねばならぬ。君には大した手助けもしてやれないが、達者で暮らしてくれ』

「ああ、なんとか達者で暮らしてみるよ」

誠一郎は白い雲を抱えた青い空に親指を立てた。

その顔に憂いは無く、これから始まる第二の人生への好奇心で満たされていた。

親指コンタクト

「まずは人の居る場所へ行かないとな」

意思疎通が可能になる言語能力の強化、あの神はそう言った。
つまり、この世界には言葉を話す者が居るという事だ。

誠一郎は踵を返し、海と反対方向にある鬱蒼と茂る雑木林へと向う。

鼻歌交じりに歩を進め、砂浜と雑木林の境目に到達した時、誠一郎は重大な事に気づいた。

「やつべ……この世界の地理とか色々何にも分かってねえ！」

頭を抱え、しゃがみ込み、うんうんと唸りを上げる。

（お、落ち着くんだ！慌てれば余計に混乱する！）

目を閉じ、深い深呼吸を一度、二度、三度。

心拍数が正常値に戻り、いくつも浮かんでは消える問いかけが消えていく。

「……おい、神様ー！」

まだそんなに時間は経っていない。
なら呼びかけに応じてくれるはず、誠一郎は一途の望みをかけて声を張り上げた。

しかし、その呼びかけに反応は無く、青い空へと消えていった。

「うわぁ……いきなりピンチかよ……」

再び頭を抱えてしゃがみ込む。

誠一郎の視界に自分の膝小僧が顔を出した。

「そうだ、軽いジャンプで結構高く飛べるんだから、ちょっと力を込めれば辺りを見渡せるかも」

自分の機転に一人で何度も頷き、砂浜へと戻った。

「出来れば比較的近い場所に村とかあってくれよ……」

両腕を後ろに振り、スクワットの要領で腰を沈める。

それと同時に両腕を下から振り上げるように動かす。

腰が沈みきったらつま先と太股に力を込め、一気に砂浜を蹴る。

砂塵を巻きながら、誠一郎は高々と空へ舞った。

雑木林が視界の下へ消えていく中、自由落下が始まるまでに村を探す。

そして誠一郎の目に映ったのは、雑木林を挟んで雄大に聳える一つの城だった。

（城がある……助かった……！）

何も無かったらどうしようと不安だった誠一郎は、城に向かってぐっと親指を立てる。

上昇力を失った体は重力に引かれ、そのまま砂浜へと落下していく。

「ひゃっほう！」

ドスンと砂浜に着地する。

誠一郎の体には捻挫や骨折といった怪我はなく、
例えば石畳の上に直立不動で着地したとしても、地面に埋まってしま
う以外は問題はない。

それほどまでに神から得た力は強大だった。

（何者にも屈しない肉体、すげえな……）

舞い上がって付着した砂を払い、誠一郎は城を目指す為、進路を
北に向けた。

といってもコンパスを持っていない為、正確な方角は分からない。
たとえ進む方角が南だったとしても、方角を目印にしていない彼に
問題はない。

「城があるという事は城下町があるはずだ。無かつたらその時考え
よう」

こうして彼は砂浜を後にし、雑木林へと消えていった。
暫くして全力疾走する羽目になる事も知らずに。

ノイマン城。

高さ10メートル程、厚さ3メートルにもなる堅牢な城壁で囲ま
れ、
内側に人口数万人を擁する城下町を持つ、それなりの規模の城であ
る。

城壁の上には等間隔に櫓が設えてあり、見回りの兵士が駐屯していた。

城から真正面に伸びる大通りがあり、城下町の丁度中央で四方に枝分かれする。

その通りを区切りとし、それぞれ居住区、商業区、学業区、軍事区に分かれていた。

大通りの先には唯一の正門となる巨大な門が聳えていた。

城の一室、控えめに、それでいて豪華に飾られた部屋。

城下と堀の外を一望できる、その部屋で望遠鏡を握り、好奇心に体を振るわせる少女が居た。

（あれはなんだったのかしら……。もつと間近で見てみたい……！）

その日もいつもの様に部屋から外を観察していた。

城下で忙しく動く民や、道行く人々を呼び込む店主達。

城から出て行く兵士の規律の取れた動き。

城壁の櫓には辺りを警戒する見回り兵。

ふと、森の方角で何かが光るのを望遠鏡の端で感じ、好奇心から光が見えたであろう方向を見つめた。

暫く見つめていても何も起こらず、少女の興味が薄れようとしたその時、

彼女の目に不思議な格好をした、鍛え上げられた肉体を持つ、人間が飛び込んできた。

その人物は彼女に向かって親指を立て、そのまま落下していった。それだけだった。

しかし彼女、エリス・フォンノイマンは奇妙すぎる人物にとっても惹きつけられていた。

この世界、リユシアン大陸では魔法の概念がある。

火・水・風・土の四属性が存在する。

しかし、魔法は相手を叩き伏せる剣として、または相手の魔法を打ち消す盾としての使い方が専らだった。

故に、人が高く空を飛ぶのは魔法で打ち上げられた時位である。

しかし、エリスが見た人物は魔法を受けて飛んだというより自ら飛んだ。それも自分の足で。そんな風に見えた。

（今すぐあれの正体を知りたい！）

胸の高鳴りが抑えられない。

今すぐにでも城を抜け出し、森を駆け抜け、あの人物。彼と言った方がいいかしら。に会ってみたい。

「ケーリス！」

「はっ、お呼びでしょうかお嬢様」

銀髪をオールバックに纏め、黒と白の執事風の男性が頭を下げた。答えた。

「私は今から出かけます」

「なりません」

即答され、エリスは目を白黒させる。

「即答だなんて……あんまりじゃない？」

「お嬢様も、もうお子様というお年ではございませんでしょう。そろそろお転婆もお止め頂かないと」

エリス専属の執事、ケーリス・ライナーは少し困った顔をしながら、

エリスをなだめるように言った。
対するエリスは腰に両手を当て、頬を膨らませケーリスを上目遣いに睨む。

桃色がかった金髪に、赤いリボンで左右に結わえたツインテール。
海よりも青いマリンブルーの瞳。

美少女　そう形容しても誰も否定はできない整った顔立ちに、白地に赤をアクセントとしたドレスが良く似合っていた。

「ついさっき面白そうなものを見つけたのよ！見に行っても良いでしょう？」

「いけません」

またも即答。

エリスは目を潤ませ、目じりを下げてケーリスに詰め寄る。
はたから見れば執事に恋する姫君に見えなくも無い状況に、ケーリスは微動だにもせず言葉を続けた。

「以前も同じような事を言って、モスの森へ入ったでしょう。あの後どうなったか、もうお忘れですか？」

「うつ……」

エリスの脳裏に森での出来事が浮かぶ。

森の中で迷子になり、モンスターに追い掛け回された恐怖。

一歩後ずさり、スカートを握り締め視線を下に落とす。

それでも諦めきれず、何か策はないかと思いを巡らす。

奇妙な服装に、あまり見かけない髪形。

喜びに満ちた表情、こちらに向けて立てられた親指。

（親指……！あれはこの城に行くという意思表示に違いないわ！）

エリスの表情に明るさが戻る。

また何か良からぬ事を思い付いたのかと、ケーリスは心の中でため息を付いた。

「ケーリス、今から言う特徴の人が城門に来たら、直ぐに謁見させるようにして頂戴」

間違った方向に決意を固めたエリスの目をみたケーリスは、
どうやっても曲げる事はできない事を感じ、渋々了承するのだった。

「では、私は準備がございますので」

ケーリスは軽く会釈をし、エリスの部屋から音も無く出て行つた。
それを見送ったエリスはにやけた自分の顔を戻す事が出来ずにいた。
早く来て欲しい、恋する乙女のように彼女は小さな胸を高鳴らせていた。

奇妙の連続

（今度は一体何を見つけになられたのだろうか）

丹念に磨かれた廊下を歩きながら、銀髪の執事はため息をついた。すれ違うメイドや兵士達が、ケーリスを視界に収めると頭を下げ道を譲っていく。

彼の姫様専属執事という地位がいかに高いかを表していた。

広い廊下を進み、同じく広い階段を下った先に、

城内としては似つかわしくない無骨な鉄の扉が鎮座していた。

扉を挟むように青みを帯びた銀の鎧を着た兵士が立ち、

その右手にはケーリスの身長程ある槍を携えていた。

彼は鉄の扉の前で足を止め、兵士達と向き合うように方向を変える。

自分達の守る扉の奥に用があることを察した彼らは、

背筋を伸ばし槍をその身に寄せ、ケーリスに敬意を表した。

「ケーリス・ライナーだ。お嬢様のご命令により参った」

「はっ！了解いたしました。どうぞ、中へ」

兵士達が扉の取っ手に手を差し込み、彼に道を譲るように扉を開く。

中では一際青みを強くした鎧を纏う兵士と、

白色に限りなく近い肌色をしたフードを纏う若い女性が数名、

門番の兵士と同じように姿勢を正し、ケーリスを迎え入れた。

ゆっくりと扉が閉まる。

ガタンと閉まり切った音と同時に、青い鎧を着た兵士がケーリスに話しかけた。

「ケーリス、今度の姫様は一体何を始めようとしているんだ？」

エリス姫専属の執事であるケーリスが、
おおよそ姫様とは関係のない「中央通信室」に来るといっただけで、
青い鎧の男と、ローブを纏った女性達は姫様の思い付きがまた始まったのだと感じていた。

「分からん。ただ、この前酷い目に遭っているからな、大それた事はしないと思うが……」

額に手を当て、頭を横に振りながらケーリスは力なく答えた。

「……ご苦労なこった」

「ジョン、そろそろ私と代わらないか？」

「謹んでお断り申し上げよう。俺には荷がおも……いや、身に余る大役だからな」

「本音が出たな？」

「滅相も無い」

二人の気の置けないやり取りに、くすくすとフォードの女性陣が口元を押さえる。

ジョン・サカツグとケーリス・ライナーは旧知の間柄である。

青い鎧のジョンは燃える様な赤い髪と真紅の瞳している。

そして小麦色に焼けた腕や足からは、衰えを感じさせない屈強さを醸し出していた。

「相変わらず今でも鍛えてるのか？」

「ああ、前線から引いたといっても、気持ちはまだ現役だからな」

ぐつと右腕を胸まで持ち上げ、自慢の筋肉に力を込める。

「お前こそ、姫様にかまけてほっそりしちまったんじゃないか？」

キラリとジョンの白い歯が光る。

両肩をすくめ、困った表情をしながらケーリスは答えた。

「かもな」

「お前が素直だと気持ちが悪いな」

「そう言うな」

彼らの短い談笑が小休憩を迎えたのを見計らい、傍に居た女性がジョンに言葉を掛ける。

「隊長、そろそろ……」

「ん？ああ、そうだな。ケーリス、姫様からの用件は何なんだ？」

ジョンは促されるようにケーリスに尋ねた。

「ああ、今から言う特徴の人間が城門に現れたら、直ぐに城に連れて来るよう頼まれてな」

「姫様の想い人でも来るのか？」

「そんなわけなかつ。お嬢様を想う輩は多いが、その逆は想像がつかん」

何気に酷い物言いに、乾いた笑いを浮かべるジョン。

「じゃあ、他国の王族……も無いか」

「ああ、お嬢様からお聞きした特徴からして、王族どころか貴族かどうかすら危うい」

「平民なのか？」

「さあな、とりあえず特徴を教えるから、しつかり門番に伝えておいてくれ」

「了解……っと、その人間はどういう扱いなんだ？」

「来賓だな」

「合い分かった」

ケーリスはジョン達の前に立ち、丁寧にエリス姫から聞いた特徴を話した。

その特徴を聞いた彼らは眼を白黒させ、お互い顔を見合わせていた。話に聞いた風貌は、彼らの想像をはるか斜め上を行っていたのだから。

未知なる風貌をした男、田中誠一郎は、
雑木林　　と思っていたら実は森だった　　の中で未知なる生物と
対峙していた。

「何なんだ、あの猪なのか兎なのか良く分からない生物は……」

誠一郎の前に、鼻息を荒くした四本足の、兎の頭をした猪が右前足で忙しなく地面を掘っていた。
頭を低くし、赤く充血した目を彼に向け、隙を伺っているように見える。

（こつちに突っ込んできそうだけど、角とか牙とか無さそうなのが
幸いだな……）

「ぶるるう……！」

兎頭の猪が太くて短い前歯を出す。

（うむ、あの前歯は危険すぎる！）

奇妙な四足動物の突撃に備え、誠一郎は腰を低くし、両手を構える。

「ぶるあああ！」

「ぶっ！」

鳴き声と共に突撃を開始した兎猪は、
あまりの珍妙な鳴き声に思わず噴出した誠一郎に渾身の頭突きを繰
り出す。

「うわっ！？」

咄嗟に横へ転がるように突撃を避け、傍を通り過ぎていった兎猪を
視線で追う誠一郎。

兎猪は器用にも両前足を軸にUターンドリフトをかまし、方膝をつ
いた彼に狙いを定めていた。

「流石野生つか！？」

「ふんぐるう！」

兎猪の突撃の開始に合わせ、左足を下げて半身になり、
頭突き攻撃が当たる瞬間、腰を落とし、兎猪の頭を抱えるような形

で受け止める。

「おうふっ！」

衝突の衝撃は思ったより大きく、誠一郎は土を抉りながら後方へと押されていく。

しかし、神の力を得た彼の筋肉の前に、徐々にその勢いは弱まっていき、

二メートル程押し進んだ所でその動きが止まった。

「次は俺の番だ！」

誠一郎は兎猪の頭を抱えている左腕に力を込め、締め上げる。

「ぶるう！？ぶるるうあ！？」

急な締め付けに兎猪は誠一郎のヘッドロックから逃れようともがく。しかし、がっちりと締められた頭を抜く事は叶わなかった。

ヘッドロックが外れない事を確認した誠一郎は、

暴れる兎猪の背中を押さえていた右腕を前足の付け根へと移動させる。

「くらえ！」

右足と前足の付け根へと回した腕に力を込め、兎猪を持ち上げる。そのまま倒れこむように兎猪の自慢の頭を地面へとめり込ませた。落下の衝撃で落ち葉が舞い、木々の葉が揺らぐ。

頭が埋まった兎猪は前足を痙攣させていたが、

誠一郎が立ち上がる頃には森のオブジェへと変わっていた。

「いやー、上手く決まって良かったわあ」

背中とお尻についた土を払いながら、誠一郎は満足げに埋まった兎猪を見ようと後ろへ振り返った。

目の前には地面に頭を埋め、奇妙なオブジェクトへと成り果てた元兎猪。

その後ろに兎猪を三倍ほど大きくした巨大兎猪が涎を垂らして立っていた。

「や……やあ、これのお母さんだったりするのかい？」

頬を引き攣らせ、ゆっくりと後退していく誠一郎。

それに合わせてゆっくりと前に進んでくる巨大兎猪。

「ひゃあああああああ！」

「ぷおるもああああ！」

誠一郎は目にも留まらぬ速さで回れ右をし、全速力で駆け出した。巨大な兎猪は、赤いマントを目の前でひらつかされた闘牛のように猛然と誠一郎の後を追う。

「こっこないでええええ！」

生い茂る草木を踏みしめ、絡みつく蔦類を筋肉で引きちぎり、道を塞ぐような木々をぶつかりそうになりながら走り抜ける。

対する巨大生物は、まるで暖簾を押し分けるように草木を蔦を、大木をなぎ倒し引き千切りながら誠一郎を追い詰める。

「こんなだったら、空を飛べるとかにしとけばよかったああああ！」

誠一郎の必死の叫びは、木々のなぎ倒される音と重戦車が駆け抜けるような足音にかき消されていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7776m/>

マッスルファンタジー

2011年1月27日07時21分発行